嘆きの井戸

嘆きの井戸

一九××年のことである。数多有名な学校に所属してる義勇団員の中に、アーサア・ナル コックスという[illegible]年と、スタンレイ・ジャッキンズという[illegible]年が、いた。二人は[illegible]年で、寄宿舎も同じ、[illegible]も同じ、したがって当然、同じ復習院の[illegible]メンバアだった。二人はまた、容貌も実によく似ていた。それが、彼等と

接触していた教師達は、熱心や面倒や、苦悩の種にさえなりそうだった。だが、まあこの二人性格性質には、なんというこういちがいがあったことか！

ポルコックスについては、こんな話があった。彼が教室へはいって行った時、主任教師はほほえみながら、見あげるようにいった。「いや、ポルコックス。お前がこの学校にもっとなかなかいると、賞與基金がなくなりそうだぞ！」さあ、このとみしいケン

別行一字サゲ

傷西伯"を[illegible]お取り。[illegible]これでわしは、お前とお前の御両親へ、心ばかりのお祝いに代える[illegible]のだ。」——まるえんなことをもあった。或る日

学長が運動場を通りかかった時、井ルコックと

人[illegible]に目をつけて、ちょっと立ちどまったが、副学長を顧みて、「あの[illegible]子は、すばらしい額をもっているね！」。すると副学長は答えて、「まったくです。あれは天才かで

あれば脳水腫を示しているのです。」

義勇軍員(スカウト)とても、井ルコックスは、いろん

バッジ
記章やら栄典やらを獲(得)ていた。みな競技
(善行を誇る)
に勝買ものだった。―火事バッジ、製図
バッジ、救命バッジ、新聞屋を集めたための
バッジ、教会[illegible]のドアを常に静かに締め
たためのバッジ等々。このうち、救命バッジ
については、筆者は、スタンレイ・ジャッキン
ズを思べる場合に一言しよう。

(この歌曲集のとれもにく)

読者は、ホープ・ジョーンズ氏がく特別の詩句をかえたと(書き)
クスを推(讃)するためのく
いても、誤いてはならない。また、この下級受

持教師が、みごとな赤ぶくろの中函に入れた善行章を、ポルックスに授けた時、感きわまって涙を流したと聞いても、驚いてはならない。

この授賞は、第三学級全部が、満場一致、彼に投票したためであった。

満場一致？　いや、筆者はまちがえた。一票だけ反対者があった。それは小ジャッキンズ（弟）だった。彼はこの反対には、すぐれた理由があるのだと言った。彼は大ジャッキンズ（兄）——スタンレイ——と偶然同級だったのである。

読者はまず、サルコックスが、この数年首席をつづけ、今では学校と給費学生団（オピダニス）の役員を兼任していたといっても驚いてはいけない。で、

学課の勉強

とある

し、こうした地位の義務も遂行するという過労のため、彼は

ひどく健康をそこねてしまった。

半年間十分な静養をしなくてはいけないと、外国へ航海などもってのほかだと厳重に言いあたされたのだった。

サルコックスは、今こうした、輝かしい

おしい向上を遂げてゆく足跡をたどることは、書くも惜しき仕事ではあるが、まあ、彼のことはこれくらいにして、時間のないから、こんどは からりと ちがった事実へ眼を振り向けよう。それはスタンレイ・ジャッキンズ——大ジャッキンズの閲歴である。

スタンレイ・ジャッキンズも、ナルコックスのようで、学校当局のしき者をひいていた。だが、それはまったく別のかたちで——だった。

例の下級受持教師は、ニコリとも笑いで

刊行一字リング

言った。「なんだ、まるめね？　ジャッキンズ。こうして行儀状のままで竟（まず）だっぱるなら、お前は、いつもこの学校へはいってることを、悔やむようになるだろうよ。ね、よくよく考えてみるがいい。そんなことにならないのが幸福だと思わなくちゃいかん。」

ジャッキンズには、まったくなんなることもあった。

校長の運動場を通りかかった時、クリッケットのボールが、ピューッと飛んで来て、僕の頭（ふくろ）に当れあった。

一つの僕方の耳がけんだ。「しめた

別所一郎リーグ

！　カット・オヴァ！〔クリッケットで、ボールにあたるか怪我しん場合いい〕』。

学長は　ちょっとときつて　間をさすりながら、『あの子は、ボールを自分で持ち、フェッチ〔行つて持つてくゝる〕するがいいと思うぬ！』。すると、そばにいた副学長は言つた。『そうですとも。あれがそばへまたふ、それこそ好み、うんとあれをフェッチ〔なぐり つけて〕やりましよう。』

義勇団員（スカウト）として、スタンレー・ジャッキンズが授与（バッジ）された記章は一つとなつた。ただ、パトロール偵察隊員仲間ふ、ひつたくつたり盗んだり

くれの夜からすこし降っていた。炊事裁縫では、陽る天蓋のオランダ爐へ、爆竹花火を差し込もうとして見つけられた。裁縫裁縫では、二人の少年をしつ[illegible]り縫いつけてしまったので、彼等がとちあわろうとするとき、ちいさな悪事をひきおこした。規律整理と定章に對しては、彼は無資格者だった。というのは、夏の授業時間で、それが特に暑くもあろうものなら、彼はインキ壺の中に、指を突っこむのだった。彼の説によれば、涼味をとるため

だそうである。彼が、落ちている新聞を拾い
あげたとすれば、すくなくとも二つのバナナ
の皮か、蜜柑の皮かを投げ入れるためであっ
た。おばさん達が、彼を見かけて近づいた
とすれば、それは、彼女等がせっかく買んだ
水桶を、どうぞ道のまん中へ持って行かない
でくれと、頼まれたためだった。おば
さん達は、それが必定どんな結果に
なるかを、十分よく知っていたのだった。
だが、これくらいはまだいい。超金義投

に於ける、スタンレイ・ジャッキンズの行為と
そは、もっとも非難に値いし、且つもっとも
広範囲にわたる事件をひきおこしたものだった。

この演習は、作戦命令のごとく、適当な範囲
から選ばれた一人の下級生を、きちんと着物
を着せたまま、手足をしっかり縛りつけ、義
務カラット
事園員がその少年を救うべき番だという時
機を見はからって、クックー堰の順もっとも深いと
ころへ投げこむのであった。

スタンレイ・ジャッキンズは、この競技に加

（彼の悪戯的な假病だったかも知れない）

あった時、どんな場合でも、いきという大事な瞬間に、はげしい痙攣の發作に襲われ、地びたにころがりまわって、びっくりするほどの叫びを發するのだった。これは当然、水中に投げこまれた生徒に對する注意を、他に轉じもらすことになった。そして、もしそれアーサア・ポルコックが居あわせなかったら、ジャッキンズの七顛八倒は、一層猛烈だったかも知れないのだった。

こういうわけで、下級生受持のジョーンズ先生は、断乎たる處理をとり、競技の中止を宣告する必要をみとめた。バーズリ・ロビンソンという級外は、五種目の競技中、落伍したのは、たが四名の下級生だけだと進言したのだ。駄目だった。ジョーンズ先生は、ジャックキンズこそ、たとえ、スカラット男爵の仕事を妨害したのだと言いジャックキンズを除く他の三名は、彼の隊では優秀なメンバーだったのだと言った。これまで校医のレイは、そして先生と、この失敗によっ

から生じた不都合は、教授から得る利益を帳消しにして餘りあるものだと感じた。その上、これ等落伍した生徒の両親達が、成績は、その両親達にとって、焦慮とも苛立ち憤慨とも

えなった。両親達は、もうジョーンズ先生が発するなぶ嘲しの、よそゆきの文句では満足しなかった。そして実際、彼等の一両人が、イートン校（英国史上の名門学校。この作者もここの校長だった。）を訪ね、貴重な時間の多くを、苦情で責め立てた。――こうして、この教育教授は、今は過去のものと

なったのである。

約言して、スタンレイ・ジャッキンズは、スカウト義勇團員達には、すっかり信用を失ってしまったのだった。彼は團から、退團の通告を受けたという噂が、一両度筆者の耳にはいっている。この成行については、ラムバートという教師がいろいろ辯護した。彼の為めに、そしてついに、一つと稿使な考慮を拂われることになった。――ところが、それは、彼は、まゝ一つの〝機會〟を與えることとなな

つたのである。

一行アケ

そこであれはは、スタンレイ・ジャッキンズの姿を、一九××年の夏休暇のはじめ、D州の、美しいW地方で行われた、義勇団キャンプの中で、見かけること[illegible]れなる。

にこやかな朝だつた。スタンレイは一二の友達――彼はまだ友達はもつていたのだ――と、ダウンせ之山のてつぺんで、日向ぼつこ

して[illegible]いた。両手[illegible]をつっかい棒に頭をのせ、腹ばいになって、彼は遠い彼方をじっと見つめていたが、

『あすこは、きっと[illegible]だろう？』

『どこさ？』友達の一人が言った。

『ほら、と下の、野っ原のまんなかに、ある木の茂りみたいなもの――――』

『ああ。あれか。あれがきっとだから、僕知る[illegible]もんかい。』

『[illegible]知りたいって思うの？』もう

一人が訊いた。

「なあにね、僕はあの眺めが好きなんだよ。きっとそこかな？　誰か地図を持ってないんだな？」と、スタンレイは言った。「我勇(スカ)

団員(ウツ)を呼んでごらん！」

「地図なら、ここにいいのがある。」と、サルフレッド・ピッ

プスキークが、才走った調子で言った。「あの

ちゃんと

巻き

はこの地図にのってらあ。だが、巻きの

中に赤い点がついてるよ。行っちゃいけない

んだろう。」

『あ[illegible]まる[illegible]園[illegible]なんかに驚くもんか。』と、スタンレイは言った。『だが、この へっぽこ地図にゃ、名が書いてないぜ。』

『ふむ。なんて名なんか、そんなに気になるのだったら、この爺さんに訊くがいいや。』

"この爺さん"とは、ちょうどそこへ登って来て、彼等のうしろに佇んでいる、老牧夫のことだった。

『お早う。坊っちゃん方。』と、彼は言った。『そうやって日向ぼっこにゃあ、ちょうどいの天氣ええが

でがすなあ。』

『ええ、ありがとう。』と、アルジャーノン・ド・モントモレンシイは、生来のしとやかさで言った。『お爺さん。あのずっと向うの岩り――あれはなんという名なんでしょうか？　そしてあの中に[illegible]なんがあるのでしょうか？』

『むろんお話しできるだがね。』と牧夫は言った。『ありやあ〝嘆きの井戸〟ちうんでがすよ。ええ。[illegible]――だが、あんたがたゝそこにでも[illegible]あのあたりで、苦しげな叫び聲を出

しちゃなんねえよ。』

『あそこには、井戸があるのですか。』と、アルジャーノンは言った。『誰がそれをつかうのでしょう？』

牧夫は笑った。『とんでもねえ。こうあたりで唄きの井戸をつかうなんて、人間は申すに及ばず、羊にさえもあしねえ。』

ここで

わしがまれてこのかた、そんな馬鹿をしたあ、だあれもいねえ。

でがすよ。』

『よし。そんなら今日、そのレコードは聴かれっちまうだろう。』と、スタンレイは言った。『というのは、僕が行くからだ。僕が行って、井戸の水を汲んで、お茶をわかすわけだ！』

『なんてえことを！　坊っちゃん！』と、牧夫は、驚いたような顔で。『そんな事を言っちゃいけねえ。先生さんは、あんたが、あのそばへ行っちゃいけねえって、

「速意なのさんなかったんかね？　速意しなすった笑だ。」

「速意はなのさったんよ。」と、ピップスケークが言った。

「黙ってろ。馬鹿！」と、スタンレイは言った。「[illegible]はどうなんだい？　水は[illegible]よらないんかね？　なんにしたって煮さえすりゃあ、萬事オーライさ。」

「[illegible]ずっとよくねえもんが、あるとこいあるらしい。」と牧夫は言った。「まあ、わ

しの知ってる限りじゃあ、わしの犬だってあ
そこへ行こうたあしねえだよ。わしゃ、それっ
て、ほうの誰かしれって、あの事じゃあ、歌
んなんか、ちっとぐれえ脳味噌をもちてえも
んだ。』

『そっと馬鹿ちゃるちゃれえ。』と、スタン
レイは、すぐ（そんなさらなよ）、文句はずれな
（三人までい）っん。そして、『誰かあそこへ（人行って）、な
んかひどい目でも遭ったのね？』

『三人の女と一人の男かね。』と、

牧夫は重々しく言った。「まあよくわしの話を聞きなさるかえ。わしはこのあたりを知ってるが、あんたみたいな気っくやいなさらぬえ。だのに、わしはくわしい話をすることができるのだよ。今まで十年が間、羊一匹あそこの野で飼われたことあねえし、作物一つあそこでメリ取ったこえあねえだ。――しかし、あそこはええ土地なんだよ。ここのだって、よく見えるが、あそこは生姜と牛蒡と人参と草の芽や殻で、蔓れ

話題になってることが」と、彼はサルフレッド・ピップスキークのほうを向いて、「坊っちゃん。あんたは望遠鏡で見てなさるが、あんたなら、とにかくわしのいう通りだといえる筈だ。」

「ああ、その通りだよ。」と、サルフレッドはうなずいた。「だが、足跡が見えるよ。誰かがいつかあそこへはいって行ったにちがいない。」

「足跡！」と、牧夫は言った。「まちがえ！」「筋ある筋だ。三人の女と一人の男

の[illegible]だ。」

「そりゃあ、どういうわけだい？　三人の女と一人の男って。」と、スタンレイは、はじめて振り返えって、牧[illegible]夫を見ながら言った。（彼はこの時まで、背中を向けたまま話をしたのだった――行儀のわるい少年だから）。

「わけ？　わけってぐ[illegible]

わしの言ってるのは、女三人と男一人[illegible]

[illegible]。」

「それは誰？」と、アルジャーノンが訊いた。「なぜあそこへ行ったの？」

「誰だったか、それを言える人は、今では四五人[illegible]でしょうよ」と、叔父は言った。「なんしろ、その人達が身をほろぼしたってのは、わしがまだ生れたより前のことだからねえ。[illegible]、なぜあそこへ行ったかってわけは、今でもまだあの人達の子だってわからねえんでさ。わしが聞いたこと以外では、あの人達あ、生きていた間は悪い人間だったのでさ。」

「はぁ〜！　なんて変な話だろう〜！」と、アルジャーノンとサル・フレッドはつぶやいた。だが、スタンレイは、軽蔑しきった、にがにがしい顔をした。

「ふん。君達は、そいつ等が[illegible]だったとでも言うのかい？　馬鹿なこと！　そんなことを信じるなんて、君達は大馬鹿だよ。そいつ等を見つけたとでも言う人間は、僕は今までみたいやつ。」

「わしは見ただよ。ほっとけん。」と、牧

夫は言った。「あの芝山のそばでね。わしの老ぼれ犬だって口がきけたら、詩人になって鳴くだよ。ちょうど今日のような日は吹だった。わしは見たぞ。――あれ等が、一人々々あの茂りの中、姿をあらわして スッと立ちあがり、あの井戸のある丘の頂のほうへ、足踏みたいに、そろりそろりあるいて行くのを見たぞよ。」

「どんな風あるいだったの？　話してよ！」と、アルジャーノンとサルフレッドは、一緒に懸命

れ訊いた。

『ぼろ着物と骨だけさ！』『人が四人と
も、（ヒラヒラするぼろ着物と）白い骨だ
けさ。あるいて行く時、カラカラという
音が聞えるように思えた。ほんとにそろり
そろりあるいてな。あっちこっちを見まわし
てな。』

『どんな顔をしてた？　見た？』

『顔なんていって　いいも　なあ　持ってや
しなかった。だが、歯は持ってたように見え

んだよ。』

『えーっ！』と、ガルフレッドは叫んだ。『そ
ぅぃ、相のほうへ行った時、あれをしたの？』

『それは言えねえんだよ。』と、相夫はつず
けて、『わしはそこん[illegible]いなかったでな。
いよいよとしんって、犬に目がはなされぬえだ。
あばれて逃げてってしまったんだのだな！』と
人を[illegible]、あいつはそれまでしなかった。
で、やっとこさあいつに追っつくと、あいつ、
まるでわしをきづれちまったようん、わしの喉

[illegible]

「食いつくとしれた。なんとかなだめてやると、どうやらわしの顔を思い出したとんとみえて、おどろかあわびでもくるよろん、這い寄って来た。わしは二度と、わしのあんたいなくなってもれえたらねえだよ。いまいまの犬ちゃとものくもな。」

牧夫のそばへまとって、少年達に話しかけいろて いんだは、主人を見あげて、いまの話はもうだほんとうでそよというふうな表情をした。

少年達は、ちょっと考え込んでいたが、

ルフレッドは言った。『で、なぜ、『夢』の『井戸』っていうの？』

『そしてあんたがた、冬の夕方の薄暗い頃、このあたりに立っていたら、そんなことを訊くことなどないだろうよ。』と、牧夫は言った。

『そんと言おうが、僕はそんな話は一言も信じないや』と、スタンレイ・ジャッキンズは言った。『僕は今にあそこへ行ってみる。もし行かなかったらぶん笑われていい。』

「じゃあ、あんたはわしの言うことを聞かんというんだな。」と、牧夫は言った。「あんたは今までもそうだが、いけないと感ぶれた時でも、それをきかなかっただな？　じゃあ、あんたは、わやみな強情っ張りなんだ。わしが大嘘をついたとこで、なんにもなるだかね？　あの原っぱへ行く者がある　とまりやあ、ちいっと足りねえ人間だね。」とにかくわしは、血氣にまかして、なんでもおち着いてしまう者は好かねえよ。」

別行一字サゲ

「僕は爺さんのは、途方もない以上の人間だと思ひよ」と、スタンレイは遣り返えした。「爺さんはお酒か、そうしたものを飲んでるらしいな。」「ええ、まるとこはみんなに関心もたくないや。でたらめ話さ。さあ、帰ろうよ。みんなだ」

そして彼等は立って云った。その二人は、「さようなら」とか「ありがとう」とか牧夫に云ったが、スタンレイは黙ったまま振り返りもしなかった。牧夫は肩をゆすり、つっ立ったまま、むしろ悲しげに彼等を見送った。

キャンプへの帰り道で、彼等の間に一大論争があった。が、スタンレイは、喋きの井戸へ行きさえすれば、牧夫の話がどんなに馬鹿げたものであるかはっきりするだろうと言った。

その夜、引率教師のバーズリー・ロビンソン氏は、いろんな訓示の間に、どの地図にも赤い圏の印がついているだろうねと訓いた。そして、この赤い印の場所へは、足を踏み入れるなよ、特に注意して置くぞと云った。

五六人がやがやいうのけれども、そうしらでも、

スタンレイは、ムッとむくれた顔で言った。「なぜ、いけないんですか？　先生。」

「いけないといったらいけないのだ。」と、「ビンソン氏は言った。「この言葉が（お前の）腑に落ちないうちは、私はそう言わざるを得ないのだ。」そして彼は、教師のラムバート氏へ（振り）返って、なにか低（ささ）い声で話（しあっ）んか、また向き直って、「この事を、みんなよく言って置く。われわれ義勇（スカウツ）團員は、あの男っぱに近かずかないよう警告されているのだ。

この あたりの 多くの 人々から、 われわれは この 地点だけに キャンプ する よう 警告 されている のだ。 もくもくと われわれは、 この 警告 に 服従 しなければ ならない。 ― みんな、 承知 だろ〜ね？』

誰も 答えず、 すると おい『はい。』と 言った。 が、 スタンレイ だけは、 こうつぶやいた。『そん な 奴の 言う ことに 服従 する なんて、 馬鹿な！』

一行メモ

日の 正午過ぎ 聞 なくの こと、 次の

よしえ 對話が聞かれた。

「ポルコックス。おまのテントには金貨掘っているだろうね？」

「いえ、先生。ジャッキンズがいません。」

「あの子は、一番始まりの先生だよ。どこへ行ったのだろう？」

「どこだか、見当がつきません。」

「誰かほかに知っている者はないか？」

「先生。喋きの井戸へ行ったのじゃないかと思います。」

『誰だ。そう言うのは？　ピップスキーク か。嘆きの井戸ってなんだ？』

『えと。あの原っぱの[illegible]そばにあるんです。――ええ、荒れ地[illegible]の樹の茂りの中にあるんですよ。』

『それは、あの赤い圓[まる]の中のことか？　太裏だ！　どうしてお前はそう思うのだ？』

『ジャックキンズは昨日その井戸のことを、むやみに知りたがっていたんですよ。牧夫の爺さんがいろんな話をしてくれて、あそこへ行

っちゃあらないって、僕たちを戒めたんです。だが、ジャッキンズは、それを信じないで、あすこへ行くって言いました。」

「馬鹿な奴だ！」と、教師のホープ・ジョーンズ氏は言った。「あれか持って行ったかい？」

「ええ。鋼と鎖を。僕達は、あそこへ行くなんて、馬鹿だと言ったんですけれど。」

「仕方のない奴！　そんな食糧を持ち出して、どんないたずらをしようと云うのか！　よし、お前達三人、ついておいで。あい

フを探さなくちゃならない。どうしてこんな最
も簡単な食合が守れないのだろう？　その節
きんはどんな話をしたのね？　いや、ぐず
ぐずしてはいられない。あるきながら聞こ
う。』

彼等はすぐ出發した。――アルジャーノン
とサルフレッドは、手早やく昨夕の話をした。
サルコックスとジョーンズ氏は、高まる心配
とともにそれに耳かたむけた。そのうち
それ彼等は、昨日は
夫を
と
山の嘴まで

行った。そこらは、例の場所が、十分に俯瞰された。まがった節だらけの松林の中に、井戸が手にとるように見えた。四人の足跡が、落ちかどろの間に、まがりくねってついていた。

へんにぎらぎら暑い日だった。海は金属の床板のように見えた。ソヨりとも風がなかった。彼等は山のてっぺんに達した時、そっくり疲れていた。で、みんな、蒸れた草の上にドタリと身を投げた。

「ジャッキンズは、まだ一つも見受けない
ね。」と、ジョーンズ氏は言った。「だが、ち
よっとそこにいよう。お前達は元氣を出して
――黙って、しっかり見張るんだよ。」と、ひ
と呼んで言葉をつぎたした。「なんだの、あの
変りが動いたよろこぶべきか。」

「ええ。」と、サルコックスはこたえた。「僕
もそう思います。ごふんなさい……いや、
あれはジャッキンズじゃありません。でも、
誰かですね。弱をもちあげて……ね？」

「私もそうだったと思うが、たしかで長はない。」

一瞬、沈黙――それから――

「いや、ジャッキンズだ。たしかに。」と、

#ルコックスが言った。「向う側の茂りを越えようとしている。見えるだろう？」

ピカピカする物をもって。あれは銃だよ。」

君の言った

「ああ、そうだ。ジャッキンズだ。樹のはしへ、まっすぐ進もうとしているんだ。」と、

#ルフレッドが言った。

その時、一所懸命に眼を据えてらんアルジャーノンが、突然叫び声をあげた。

『や！ 足踏の上になんだか？』『つの足踏の上――おお！ あの話の女だ。おお、見たくもない！ なんにも起りません よろこれ！』と、こう言いながら、彼はころがりまわって革をひっつかみ、それを頭を押めしこれ。

『そんな事はやめろ！』と、ジョーンズ氏は大声高に言ったが、氏は叫んだ。『さあ、私はあそこへ降りて行かなくちゃならん。』#

ルフレッド、お前はそこにいて、アルジャーマンに氣をつけてられ。サルコックス、お前は一所懸命に走って行って、誰かもそこに人を連れておいで。」

ジョーンズ氏とサルコックスは駆け出した。

サルフレッドは、ひとり残ってアルジャーノンを鎖めようとベストをつくした。が、とてもよくはなかった。時々彼は山の下や野のほうへ眼をやった。

ジョーンズ氏は、大股に歩んで、近か

づいて行ったが、おやっと驚いたことには、ジョーンズ氏は、ハッと立ちどまって顔をあげ、ぐるりを見まわしたのと思うと、急角度に重心を返えしたのだった！

どうしたわけなのか？　僕はなお奇っぱのほうを見つめると、黒いぼうしを着て、白っぽい襞布をそれのぞ　はみ出させているなにか――恐ろしい姿を見たのだった。細長いくたくたによごれた顎の上に乗っかった顔は、日ボンネットの婦人帽よりけで半ばかくれていた。

そいつは、近かづくにつれてジョーンズ氏の、押し出すように、痩せた手を振るのだった。そいつとジョーンズ氏との間の空気は、揉れきらめくように思われた。こんなことは今まで見たことのなかった。そして、ポルフレッドは、眼を見はっているうちに、あたりの中[illegible]れ、なにか動揺混乱するものを感じはじめ、[illegible]その力が次第に緊迫してきて、誘惑などのではないかと考えるようになった。

彼は急いで、スタンレイ・ジャッキンズへ視線を移した。●スタンレイは、茂りのほうへ、やや足早やに進もうとしていた。動作はスカウト団員のおきまり通りだった。だが彼は嚙みつく木の枝を踏んづけぬように、毒の蜘蛛にひっかからぬようにし、注意して歩を運んでいるのだった。彼は、なにも見かけないものの、或る待ち伏せを用心して、音を立てないようにしているのだった。

これらのことを、#ルフレッドは、ことごとく認めたのだったが、その上に、彼は、まらっと以上のものを認め[illegible]て、たちまちハッと[illegible]膝を冷やした。彼は樹の間に、なにか動くものが待ち構えているのを知った。しかも、もう一つ——恐ろしげな黒い姿の[illegible]が、[illegible]っぱの別の方面から、足跡ずたずたそろりそろりと、あたりを見まわしながら、動き出した。しかも更に悪いことには、第四のもの——まちがいなく、今度は男[illegible]

それは牧夫が話したよりなく

だったが――不幸なスタンレイのニヤード
ヒョロリと姿を現わし
石の蔭りから、
いかいと苦しげな様子で、足跡の向い迫い込んで
行くあわれむべきスタンレイは、遂に四方
を遮断されたのだった。

ポルフレッドは、遠方に暮れてしまった。
すぐアルジャーノンに飛びついて、ゆすぶっ
た。『起きろ。』と、彼は言った。『叫けべ！ 聲
かぎり叫ぶんだ。おお、僕たち、呼ぶ子笛を
持ってたらなあ！』

アルジャノンは、元氣をとり戻した。「そこにある。」と、彼は言った。「ナルコックスのだ。落して行ったのだ。」

そこで一人は呼子笛を吹き、一人は叫んだ。静かな大氣の中に、響きは伝わった。スタンレイは聞きつけた。立ちどまった。ぐるりを振り返えった。たちまち彼は聲をあげた。

山の上の下、二人の少年が聲よりも、ずっと鋭いもの凄い叫びだった。

だが、もう手おくれだった。スタンレイの

背後にうずくまっていた黒い姿は、彼に飛びかかり、その腕のあたりを、ひっつかんだ。

前方に立っていた女の姿は、まっすぐ両手を振っ

たと。一つの姿は、ジリジリ前進した。

彼女もまっすぐ自分のほうへ進まないで掴

よろめ両手をつき出していた。そして

遠くはなれていた姿は、

これしげしげをつきそめ、急いで近

寄って行った。

待ちかねに

踊躍

踊躍

サルフレッドとアルジャーノンは、恐ろしい沈黙の一瞬間れ、萬事を了解した。そして男の姿とスタンレイの間れ、はげしい掴み合いが行われてるのを見た時に息は、そして息をつくこともできなかった。

スタンレイは、唯一の武器の鋭話でなぐりつけた。

それで縁の破れた黒帽が、相手のあたまから落ちた。そして白い頭蓋骨——女の来かとも思われる。——しみのついた白い頭蓋

骨があらわれた。この時、女の姿の一人が、そばに行ったかと思うと、スタンレイが頸に捲きつけている紐をグイッとひっ張った。その一瞬、肩はついた。若しげな叫びがパッタリやんだ。そして三人の姿は樅の樹の輪の中に消えた。

まい一瞬間は、恐いの手が届きそうに見えた。ジョーンズ氏は、急いで大股に進もうとした。突然立ちどまり、振り返えり、眼をこすったようだった。そして

こんどは

真っぱの

方へ走り出した。そこで井ルフレッドとアル
ジャーノンは、うしろへ眼をやった。する
とキャンプの一隊が、湧る芝山のてっぺんへ
馳せ参じたばかりか、あの牧夫の爺さんが、
自分達の山へ駆け登って来るのが見えた。二
人の少年は、手招きし、声をあげ、
牧夫へ向けて、二三ヤードも駆
け寄ろうとしては、あと戻りした。牧
夫は黄調を早めた。

もう一度、二人の少年は顔つぱを見やった。そ

くにはまれも眼に入るものがなかった。いや、——樹々の間にまれかあったか、それとも霧かかっていたのか——ジョーンズ氏は岩りを跳び越えくようにして、草むらを跳び越えぬけていた。

二人の少年のそばに、牧夫が喘ぎながら、つっ立っていた。二人の少年は駆け寄ってその両手にかじりついた。「あいつ等が、ジャックンズをつかまえたんだよ！　樹の間へ隠えちまったんだよ！」——それが、やっと繰り

かえし口からでまかせの言葉だった。

「なんだって？　あの子が、昨日わしの話したあそこへ、とうとう行ったって言うだかね？　可哀そうに！　可哀そうに！」

[illegible]よっとした牧夫の言葉の中へ、ほのの聲がみ飛び込んだ。キヤンプのの救いの人々が到着したのだった。二三、忙しげな應答がすると、全員は芝山を[illegible]まっしぐらに駆けあがった。

彼等が原っぱに足を踏み入れようとすると、ジョン・ジャッキンズ[illegible]を肩に[illegible]、[illegible]した[illegible]

ズ氏に出くわした。ジョーンズ氏は、それが樹にひっかけられて、フラフラ揺めているのを、枝を切っておろしたのだった。屍體には一滴の血もなかった。

ここは、ジョーンズ氏は、あの林の樹という樹を切り倒し、一つぱの草むらという草むらを焼き払うという趣旨を言明して、斧をひっさげ、敢然と出向いて行った。ところが、氏は、脚にひどいかり傷をこしらえ、折れた斧の柄をもって

戻って来た。氏は火の粉一つ燃えあがらずとも
できず、樹一本取り除くこともできなかったのだった。

筆者は、嘆きの井戸の現在の人口(ポピュレーション)は、三人の女と、一人の男と、そして一人の少年からできあがっていることを聞いている。

アルジャーノンとサルフレッドが受けた衝撃(ショック)は、ずいぶんひどかった。両人とも即刻キャンプを去った。そしてその性急は、言うまでもなく、[illegible]当時の

人々――死んだ大ジャックキンズを除いて――には、暗黒裡に葬られてしまった。この死者の魂乃至精神を再生すべき第一人者は小ジャックキンズだった。

これが、スタンレイ・ジャックキンズの身の上話であり、まゝアーサア・ポルコックスの身の上話である。今までこの事はどこでも聞かれたことはなかったと信ずる。もしこの話が道徳をもっているとすれば、その道徳は明白である。と思う。もしもっていないとすれば、

~~横~~
65

どんなふうにその話を修正すべきか、筆者に
はよくわからない。